

## はじめに

行き帰りとも飛行機を利用し、クーラー付きでしかも全館二重窓で防音した施設に寝起きし、眺めのよい風呂で汗を流して、賄い付きの食事に舌鼓を打ったのだから、今年の実習調査は豪華であった。困苦歎乏に耐えるのが即ち若者であった時代の私など、学生をこんな目に遭わせてよいのだろうかと本気になって心配した。それほどに、北谷町教育委員会の方々の御配慮は行き届いたものであった。御礼の言上に華やかな言葉を連ねたい衝動が突き上げてくる。

実習の対象はグスクであり、その石垣の一部の検証が調査の主な目的であった。実測班は地形だけでなく石組の複雑な様相を測り出さねばならず、写真の担当者は深いジャングルの木洩れ日の造る段だら文様と格闘せねばならなかった。石垣そのものが積み直されたり片づけられたりして塵捨場のようになっており、おまけにあのサンゴ石を用いてあるので、一体何がどうなっているのやら、多分二年生には納得がゆかぬままだっだろう。生活の豪勢さと調査の晦渋さがひどくアンバランスで、エネルギーの不完全燃焼を招来したようだ。

それと繋がるのかどうか、何人かは帰宅せぬままで、別の何人かは一度帰宅してすぐに、別の発掘に参加した。これはよいことだ。実習で学んだ基本は直ちに体験を繰り返し、判断が反射的になるまで練習するのがよい。このことは、是非に研究室の習慣として定着させたいものである。

なお、この報告書造りの指導を最後の仕事にして岩崎充宏助手が転出する。これまでの労をねぎらい、将来の活躍を期待したい。

1991年3月15日

白木原 和美

## 例 言

- 本書は熊本大学文学部考古学研究室による沖縄県中頭郡北谷町字大村の北谷城（チャタングスク）の発掘調査概要である。
- 発掘調査は北谷町教育委員会の委嘱により研究室の実習調査として実施された。なお、調査にあたっては北谷町教育委員会の協力を得た。
- 発掘調査は1990年7月13日に開始され、7月24日まで計12日間にわたって行われた。
- 本書の編集は岩崎が行い、執筆者は各文末に記した。
- 調査参加者は以下のとおりである。  
白木原和美 甲元眞之 岩崎充宏  
山下志保（大学院2年次生）  
秦 憲二（4年次生）  
市川浩文 大田真由美 川俣 恵 田中聡一 水上綾子 大和優子（以上3年次生）  
池田昌一郎 猪腰 聡 高橋 誠 三浦正敏 横尾亜由美（以上2年次生）  
なお、整理作業は全員で行ったが、上記以外に限本直子（2年次生）も参加した。

## 本文目次

一、環境と立地	1
二、調査の目的と経過	7
三、層序と遺構	8
四、出土遺物	13
五、まとめ	21

# 挿図・図版目次

## 挿図目次

第1図	沖縄本島グスク分布図	2～3
第2図	北谷グスク周辺の地形図	5
第3図	地形測量図	6
第4図	青磁実測図	14
第5図	青磁・白磁実測図	16
第6図	陶器・土器実測図	18
第7図	石器・鉄器実測図	20
付図	遺構実測図	

## 図版目次

1上	北谷グスク遠景(北東より)	7上	三の郭側遺構検出状況(南東より)
下	同 近景(池グスクより)	下	Y-99、Z-99グリッド遺構検出状況(南東より)
2上	二の郭側発掘区(W-100、X-100グリッド調査前北東より)	8上	X-99グリッド遺物出土状況
下	三の郭側発掘区(Z-99・100グリッド調査前 南東より)	下	X-99グリッド遺物出土状況
3上	三の郭側発掘区(X-96・97、Y-96グリッド調査前 南西より)	9上	出土磁器(縮尺1/2.5)
下	X-96、Y-96グリッド調査後(南東より)	下	出土磁器(縮尺1/2.5)
4上	二の郭側発掘区遺構検出状況(北東より)	10上	出土磁器(縮尺1/2.5)
下	W-100、X-99・100グリッド遺構検出状況(北東より)	下	出土陶器(縮尺1/2.5)
5上	W-98、X-97、98、99グリッド遺構検出状況(西より)	11上	出土土器(縮尺1/2.5)
下	二の郭側発掘区遺構検出状況(南西より)	下	出土石器・鉄器(縮尺1/2.5)
6上	W-98、X-98・99グリッド遺構検出状況(南西より)		
下	W-98グリッド遺構検出状況(南西より)		